



ある日の出来事

かつてのタウエントツィーエン連隊の指揮官フォン・ビュルガーに、完成したばかりの散歩道の上で疲れた様子の労働者ブリーツが言った。「そもそもこの木は、その下で二人が立つには小さ過ぎます。申し訳ないですが、別の木に移っていただけませんか。」物静かで、控え目な男だった指揮官ビュルガーは、実際、別の木に移ってやった。その直後、その場所で、ブリーツは雷（ブリッツ）の直撃を受け、亡くなったのである。

TAGESBEGEBENHEIT

フランス人の公正さ（ブロンズに刻まれるべき）

あの戦争中、フランス軍のユラン将軍のもとに一人の市民がやってきて、戦時国際法での接收をあてにして、敵の利益をはかり、鉄舟用の小屋に置かれた材木の数について密告した。ちょうど着替えを済ませたばかりの将軍が言った。「駄目だな、この材木は受け取れない。」——「どうしてですか？」——市民が訊いた。「これは国王の所有物だろう——だったらなおさら、」と、将軍は男を一瞥しながら言った。「プロイセン王にはこの材木が必要だ。お前のようなならず者をそこに吊るすために。」

FRANZOSEN-BILLIGKEIT

市参事会の困惑 ある逸話

それほど昔の話でもないが、H—r市の一人の市兵が、指揮官の許可を受けずに、市中の警護の持ち場を離れた。ある極めて古い法律によれば、この手の犯罪は、かつてはそれが貴族の巡察業務に関係し、今よりはるかに大きな重要性があったことから、本来は死罪に相当するとされる。ところが、この法律は明確な文言で廃止されることなく、以来、数百年、何にも適用され

ずにきた。そういうことで、このような罪を犯した者には、死罪を言い渡す代わりに、定着した慣例にならって、単なる罰金を市の金庫に支払えと命じる判決が下されることになっていた。しかし、名前をケールという金を払いたくないこの男は、次のように言って市参事会を大いに驚かせた。「とにかく、書かれているのなら、法の定めに従い、死にたいと思います。」何かの間違ひと思った市参事会はケールに交渉人を送って、銃殺されるより数ギルダーを払った方がどれだけましかを分からせようとした。しかし、ケールは、「人生に倦み疲れしました、死にたいのです。」と、あくまで言い張るので、無益な殺生を嫌う市参事会はこのひょうきん者への罰金刑を免除するより他なく、この男が、「そういうことなら生きてみます。」と、言った時は、喜びすら覚えたのであった。

DER VERLEGENE MAGISTRAT Eine Anekdote

神の石筆

ポーランドに、フォン・Pという伯爵夫人がいた。高齢の婦人で、悪辣な生活を送り、とりわけ従者たちが、その吝嗇と無慈悲さで、塗炭の苦しみを味わっていた。婦人は、死を迎えるにあたり、免罪符を授けた修道院に財産を寄進したが、これに対して、修道院は、ブロンズで鋳抜いた、ぜいたくな墓碑銘を墓所に建立して、これまでの行状を仰々しい言葉で書き連ねてやった。その数日後、墓碑銘の上に落雷があり、ブロンズが溶け出したことで、そこに数個の文字だけが残ったが、それを拾い読むと、いわく、「カノジョハサバカレタ！」——この事件は（律法学者たちが喜んで説明するだろうが）、全くの事実である。この墓碑銘はいまなお実在し、この墓碑銘と事件の目撃者も、あの町でいまだに存命中である。

DER GRIFFEL GOTTES

逸話 先のプロシャ戦争から

イエーナに隣接する村で、フランクフルトに向かう途上にあつた私に、宿の主人が話してくれた。「あの戦闘の数時間後、この村がフォン・ホーエンローエ皇子の軍隊に完全にうち捨てられ、この村を占領していると思われるフランスの軍隊に取り囲まれてしまった時、一人のプロシャ軍の騎兵が、姿を現わしたのです。」それから、こう断言した。「あの日、戦っていた全

ての兵士が、この男と同じくらい強ければ、フランス軍も蹴散らされていたでしょうが。やつらが、あと三倍、強ければね。この男は、」と、宿の主人は言った。「ほこりまみれで、この宿屋の前に馬を駆って姿を現わすと、叫んだのです。『主人はいるか？』そこで私が、『何にいたしましょう？』と、訊きますと、『火酒を一杯！』と、剣を鞘に収めながら、答えるのです。『喉がからからだ。』『神のご加護を！』と、私は言いました。『あなた様も、ここを離れるお積もりでしょう？ フランス軍は、もうこの村の目と鼻の先ですぞ！』『ん、何だって？』男は、馬の首に手綱をかけながら、言いました。『俺は、この一日、何にも口にしていないんだから！』まあ、この男は、悪魔にでも憑かれていたんだと、私は思うんですが――！『これ！ リーゼや！』と、私は叫び、一瓶のダンツィヒを彼の前に運んでやりながら、言いました。『どうぞ！』そうして、瓶ごとを手にとらせようとすると、何と彼は、それを持ったまま馬に跨ったのです。『ああ、うまい！』と言うと、瓶をこちらに突き返ししながら、帽子も脱ぎました。『チーズはどうしましょう？』『ここに注いでくれ！』と言いながら、男は額の汗を拭きました。『なぜって、時間がないんだから！』『死にに行くようなものですよ。』と、私は言いました。それから、『どうぞ！』『注いでくれ。』『そら！ 飲んで、お行きなさい！ さあ、乾杯！』のやりとり。するとまた、『もう一杯！』と、男は言うのです。すでにあらゆる方向から、この村に射撃が加えられているというのにです。私は言いました。『まだお飲みになるんですか？ 余程、喉が渴いていらっしゃるんですね――！』『もう一杯！』と、男は言い、杯を差し出しました――。『きっちり計れよ。』髭をさすり、馬上で水漬を切りながら、男は言いました。『なぜって、現金で払ってやるんだからな！』『いやあ、そんな滅相もない！』本当は、それを望んでいたんですがね――。『どうぞ。』と、私は言い、望み通り、もう一杯注ぎ、また男が干したので、もう一杯注いで、そこで訊きました。『ご満足いただけましたでしょうか？』『ふう！』――男は身を震わせました。『シュナップスがしみる！――さて！』そう言うと、帽子を被りました。『いくらだ？』『結構です！ 結構です！』私は答えました。『あなたも引き上げたらどうですか、ちくしょう。フランス軍は、今にもこの村に入ってくる！』『さて！』と、長靴に手を突っ込みながら、男は言いました。『ただにしてくれるとは、お前にも神の恩寵があるだろうよ。』そうして、長靴からキセルの吸いさしを取り出すと、雁首を息で吹きながら、言いました。『火をくれんか！』『火ですって？』と、私は言いました。『まだ、何か不足なんですか――？』『そうだよ、火だ！』と、男は言いました。『なぜって、煙草で一服したいんだよ。』『いやはや、この男には悪霊のレギオンが乗り移っているのか――！ これ、リーゼや！』私は、娘を呼びました。そうして、男がキセルに煙草を詰めている間に、この女が火を運んだのでした。『いやはや！』と、火のついたキセルを口にくわえながら、男は言いました。『だが、これからは、フランス軍が大混乱だ！』そうして、帽子を目深に被り、手綱を手に取りながら、馬をくるりと反転させ、剣を抜いたのでした。『どえらいやつだ！』と、私は言いました。『いまましい、日に焼けてぼろぼろになった、絞首台の綱！ お前には、自分が本来ふさわしい絞首刑吏の名前が、気にはならないのか？ 三人の狙撃手――お前には、あれが見えないのか？ やつらは、もうすでに門のところで待ち構えているのだが？』『ん、何だって！』男は、ぺっと唾を吐きながら、そう言うと、三人の男にたちまち狙いを定めました。『あいつら

が十人連れでも、俺はちっとも恐くない。』そうして、その瞬間、三人のフランス兵が、騎馬で村に乗り込んできたのでした。『バッサ・マネルカ！』と、男は叫び、馬に拍車を当てると、一気に跳びかかっていきました。嘘偽りなく言いますが、男は一気に跳びかかった、つまり、あたかも自分の後ろに、ホーエンローエの全軍が控えてでもいるかのように、襲いかかりました。そういうことで、村にさらにドイツ兵がいるのかを知らない射撃手が、その習慣に反して、一瞬たじろいだことから、この男、わが魂は、手の平を返す間もなく、三人全員を鞍から引きずり降りし、その場から走り出した馬を捕まえて、三頭を率いながら、私の横を駆け抜けることになったのでした。そうして、『バッサ・テレムテーテム！』と、叫ぶと、『よく見ていただろうが、なあ、主人？』『さらばだ！』『また会おう！』『ホーホ！　ホーホ！　ホーホ！』と、続けました。全くあんな男には、後にも先にも、お目にかかったことがありません。」と、宿の主人は語った。

※バッサ・マネルカ、バッサ・テレムテーテム＝トルコとの戦争からきた兵士の罵り言葉

ANEKDOTE AUS DEM LETZTEN PREUSSISCHEN KRIEGE

運命のいたずら　ある逸話

彼の歩兵連隊があったフランクフルト・アン・デア・オデルで没した、ディーリングスホーフェン将軍は、厳格で誠実な性格の持ち主であったが、かなり独特で、風変わりなところがあった。晩年、長引く病のために、死の床に就くと、彼は、遺体洗浄人の手に落ちることへの強い嫌悪を露わにした。どんな例外もなく、遺体を誰の手にも触れさせてはならない、ナイトキャップ、ズボン、ガウンは、着ていたままの形で身にまとわせ、死んだそのままの状態に棺に横たえてもらいたいと、彼は、はっきりと言明した。そうして、当時の連隊の従軍牧師で、一家の友人でもあったP氏に、最後の望みが果たされるのかどうかの不安を除いてくれるように依頼した。従軍牧師のPは、そのことを確約し、あらゆる偶然を回避するため、将軍がこの世を去った瞬間から、埋葬されるその時まで、その側を離れずにいることを請け負った。それから数週間が経ったある日の早朝、まだまどろみの中にあつた従軍牧師の屋敷に従者がやってきて、すでに真夜中の頃に、分かっていたことではありましたが、将軍が安らかに息を引き取りましたと知らせてきた。従軍牧師のPは、約束に従って、すぐに着替えを済ませ、将軍の屋敷に向かった。しかし、そこで彼が見たものは？――将軍の遺体が、すでに石鹼を塗られ、床几の上に横たえられていた。あの命令を知らなかった従者が、差し当たり、見苦しくない体裁に整えるため、髭をそり落とすための髪結いと呼んだのである。このように奇妙な状況において、従軍牧師にできることといえば何がある？　彼は、自分をもっと早く呼びにこなかった従者をその場から去らせると

、将軍の鼻を落ち着き払った様子で掴んでいた髪結いを退け、他にやれることもなく、見た時のまま、石鹼を塗られ、髭を半分つけた将軍を棺に横たわらせて、埋葬したのであった。

MUTWILLE DES HIMMELS Eine Anekdote

施療院での出来事

先日、ある御者に轢かれた、名をバイヤーという男は、人生においてすでに三度も同様の運命を味わされてきた。そういうことから、枢密顧問官のK氏が、施療院で彼に行おうとした審問の際、あの笑うべき誤解も生じたのであった。最初、彼の二本の脚がよじれ、ねじけ、血まみれになっているのに気付いた枢密顧問官は、訊いた。「この脚を怪我したのかい？」これに対して、彼は答えた。「いいえ！ この脚は、もう五年も前、別のお医者様に轢かれたものでございます。」その時、枢密顧問官の脇に控えていた医師が、左の眼球の破裂に気が付いた。しかし、「車輪がここに当たったのかい？」と訊かれると、「いいえ！」と、彼は答えた。「この目は、もう十四年も前、別のお医者様に轢かれたものでございます。」最後に、居合わせた全ての者の大いなる驚愕と共に、左の肋骨の半分がひどく損なわれて、背中を突き破るようにねじ曲がっているのが見出された。「あのお医者様の車が、傷を付けたのはここかい？」と、枢密顧問官が訊いた。彼は答えた。「いいえ！ この肋骨は、もう七年も前、別のお医者様の車にぶつけられたものでございます。」――最後の最後、先日の事故による、左耳の軟骨の聴覚器への貫入が明らかとなった。――わが特派員は、この出来事についてこの男自身に取材したが、そここの広間のベッドで寝転がる重病人ですら、この話をする際の男の滑稽で投げやりな口調に笑いを禁じることができなかった。――ついでに言えば、男は快方に向かっている。大通りに出る時、お医者様にさえ気を付ければ、まだまだ長生きできるだろう。

CHARITÉ-VORFALL

大酒飲みとベルリンの鐘（ある逸話）

かつてのリヒノフスキー連隊の一兵卒で、度しがたい、治癒の見込みのない大酒飲みが、そのために受けた果てしない打擲の末、自らの品行を改め、火酒を断つことを約束した。実際のところ、三日の間は約束が守られた。しかし、四日目のこと、里標石の上でまたべろべろになって

いるのを見出され、下士官によって拘禁されたのであった。尋問の中で彼は、決意を忘れ、なぜ再び飲酒の悪癖に身を染めたのかと詰問された。「中隊長殿！」と、彼は答えた。「悪いのは私ではございません。ある商人からの頼まれ仕事で、染料にする木材の入った箱を抱えて、遊歩庭園を歩いていた時のこと、大聖堂から鐘の音が聞こえてきました。『ポメランツェン酒！ ポメランツェン酒！ ポメランツェン酒！』『鳴れ、くそつたれ、鳴れ！』と、言うど、決意を思い出し、飲みませんでした。木箱の引き渡し先であるケーニヒス通りで、休息のため、市庁舎の前で佇んでいた時のこと、鐘楼の方からチンチン聞こえてきました。『呑め！ 呑め！ 呑め！――呑め！ 呑め！ 呑め！』私は、鐘楼に向かって言いました。『雲がちりぢりになるまで、チンチン鳴っているがいい！』そうして思い起こしました、あなた様、自分の決心を、本当に喉が乾いているのかどうかを思い起こし、飲みませんでした。そこからの帰り道、悪魔に唆された私は、養老院の中にある市場にきていました。そうして、ちょうど飲み屋の前に立っていた時のこと、そこには三十人以上の客が集まっていたましたが、養老院の尖塔の方から聞こえてきました。『アニス酒！ アニス酒！ アニス酒！』『一杯、いくらだ？』と、私が訊くと、主人が答えました。『六ペニツヒです。』『もらった。』と、私は言い、――それから先、どうなったかは、もう分かりません。」

DER BRANNTWEINSÄUFER UND DIE BERLINER GLOCKEN (Eine Anekdote)

先の戦争からの逸話

おそらくこの世が続く限り、語り伝えられるであろう末恐ろしい警句を、先に行なわれた戦争が遂行される中、一人の鼓手が発した。この鼓手は、私の知る限り、当時のプトゥカマー連隊の一員であった。同時に皆の聞くところでは、ギリシャやローマの歴史もこれに比肩するものを提供できない、そういう種類の人間でもあった。この男は、イエーナでプロシャ軍が壊走した後も、一丁の小銃を調達して、自力で戦闘を続行した。そういうことから、男が街道の上に立って、射程に入るあらゆるフランス人を撃ち殺し、強奪しているところを、男を探し出したフランス軍の近衛騎兵の一隊に捕らえられて、市中に引き出されて、当然のことながら、銃殺刑の判決を受けることになった。男は、刑場に足を踏み入れて、釈明のために提出した全てが無に帰したのを見て取ると、この分遣隊を指揮する指揮官に願いを一つ叶えてもらえないかと希望した。そして、男を囲んでいた将校たちが、好奇心を露わにして集まってくる中で、指揮官が訊いた。「何を望むのか？」ズボンを脱ぎながら、男が言うのには、「お前たち、F――にL――ができないよう、俺の――を狙って撃つんだろう。」――人はここから、鼓手が自らの機知を鼓手の領域から足を踏み出さずに用いるという、シェークスピア的な特徴を見て取るべきであろう。

ANEKDOTE AUS DEM LETZTEM KRIEGE

逸話

バッハは、妻を亡くし、葬式の準備に掛からなければならなかった。この哀れな男は、しかし、普段から全てを妻まかせにしていた。そういうことから、老いた召使いが歩み出て、買ってくるよう指示された喪章の代金をいただきたいと申し出ると、静かな涙に暮れながら、机に突っ伏した彼は、こう言った。「そういうことなら、妻に言ってくれ。」

ANEKDOTE

まねるべきフランス軍の訓練

戦闘の開始にあたり、敵の火砲を尊重する、あるいは殲滅するために、特定の砲兵中隊を配置しようとするフランス軍の砲兵隊の大佐は、まず選ばれた場所の真ん中に立つ。それは、教会の墓地かもしれない。緩やかな丘かもしれない。雑木林のてっぺんかもしれない。彼は剣を抜きながら、帽子を目深に被って、そうして、あらゆる方向から轟音とともにやってくる敵の砲弾の雨の中、各砲車が、おのれの仕事に着手するために射撃位置につくと、握り締めた左手でそれぞれの火砲の操作者（火薬係下士官）の胸倉を掴み、剣の切っ先で地面の一点を指し示しながら、こう言う。「お前の死に場所はここだ！」その時、彼は相手を凝視している――そして、また別の者に対して、「お前の死に場所はここだ！」――三番目の、四番目の、これに続く全ての者に対して、「死に場所はここだ！　ここで死ね！　死ぬんだ！」、最後の者に対して、「死ぬんだ！」――死ねために砲兵中隊が戦列に並べられた場所における、はっきりとした、婉曲でない、砲手に対するこれらの訓令は、よく言われるように、戦闘の中でうまく実施された場合、絶大な効果を発揮する。

FRANZÖSISCHES EXERZITIUM das man nachmachen sollte

謎

お互いが恋愛関係にあることが知られていなかった、若い法学博士と修道女が、ある時、市の司令官宅での大勢の尊敬すべき人士たちの集まりの中にいた。女は、若く、美しかったが、当時の流行にならい、顔に、小さな、黒い、さらに言えば、口の右側の、唇にかなり近いところに、つけぼくろをしていた。さて、何かの偶然から、ある一瞬、人士たちの全員が部屋から追い出されて、そのために、法学博士とその女だけがそこに残されることになった。そこに戻った皆がおしなべて不審に思ったことには、博士が、顔の、さらに言えば、唇のかなり近くの、しかし口の左側に、つけぼくろをしていたのである――！

(解決は次章で)

RÄTSEL

今日の出来事

今日、死刑に処せられた槍騎兵ハーンの犯罪、それは次のようなものであった。彼が犯した軽微な職務違反を理由に、騎兵曹長パーペが、上官からの命令で彼を拘禁しようとしたのである。そのため、通りの向こうから、衛兵の監視下に入るよう大声で呼びかけたが、自分が立っていた窓をぴしゃりと閉めながら、ハーンはこう答えた。「そんな優男に、この俺が捕まってたまるか。」そういうことから、騎兵曹長パーペは、彼を力づくで連行するため、その部屋に足を踏み入れることとなった。ところが、この荒くれ者による拳銃の一発が命中したことで、パーペは、瀕死の状態でその場に昏倒してしまった。そう、銃声を聞いて、彼の連隊の兵士たちが駆けつけてみると、ハーンは、武器を手に、彼らに敬意を払おうとしているように見えた。それから彼は、血の海をのたうつ騎兵曹長の脳に、さらなる一発をぶちこんだ。しかしすぐに、何人かの勇猛な同僚たちに武器を取り上げられると、獄に入れられた。国王陛下は、この法律事件が明々白々であることから、軍事法廷によって決定された、車裂きの刑に処すという判決の執行を、即座に行なうように命じられた。

TAGESEREIGNIS

特派員通信

しばらく前からケーニヒスブルクに滞在中のウンツェルマン氏は、これが決定的に重要だが、確かに観客たちには大うけなのだ。しかし、批評家（ケーニヒスブルク市民新聞を読めばそれは分かる）や監督にとっては、悩みの種になっていた。聞くところでは、監督は彼にアドリブをすることを禁じて、あらゆる種類の抵抗を嫌うウンツェルマン氏も、この命令を受け入れたということ。ところが、ある場の上演に際して、劇場に持ち込まれていた一頭の馬が、観客たちも大いに驚いたことに、舞台の真ん中で脱糞をした。その時、彼が科白を中断して、突然、馬の方に向き直りながら、言ったのが、「お前、監督からアドリブは禁止だって言われなかったか？」——これにはあの監督もクスリとさせられたのに違いないと、皆がその話でもちきりである。

KORRESPONDENZNACHRICHT

逸話

一八一〇年にルードルシュタットのホーフ書店から出版された、『連隊随行録、一八〇九年』と題される書物の中で、あるフランス人が、皇帝ナポレオンについて、次のような逸話を語っている。それは、大きな同情心を感じる彼の能力について、一つの不思議な例を提供してくれる。ナポレオンが、アスペルンの戦いの際、強い感情を露わにして、負傷したランヌ元帥を抱き締めたと話している。この戦いが行なわれた晩、彼は、散弾砲撃の真っ只中、自らの騎兵隊の攻撃をジッと見つめていた。多数の負傷兵が、彼の周りに横たわっていた——この出来事を目撃者の証言では、自分たちの悲嘆の声が皇帝の重荷にならぬように、彼らは押し黙ったままでいたという。その後、敵の優位をかわすために、フランスの甲騎兵連隊の全軍は、この不運な人々を見殺しにした。怨嗟の大きな呻き声が、（いわばそれを覆い隠すために）混ぜ入れられた、「皇帝万歳！ 皇帝万歳！」の雄叫びに交じって、聞こえていた。皇帝は、さっと後ろを向いた。手で顔を被いながら、涙が両目から溢れていた。ただ非常な努力によって、彼は平静を保った。

ANEKDOTE

昔あった帝国議会の祭典、あるいは盲人と豚との戦い

アウグスブルクの皇帝マクシミリアン一世が、トルコとの戦いに向けて世論を動かすため、帝国議会を招集した時、領主や貴族たちは、様々な騎士らしい慰みごとにうつつを抜かしていた。ところが、皇帝向けの娯楽というものを、マクシミリアンの宮廷道化師であり、軍の大佐でもあった、クンツ・フォン・デア・ローゼンが、編み出したのである。すなわち、ワインの市場の、丈夫な棚でぐるりと囲まれた場所の真ん中に、一本の柱が据えられた。そして、その柱に、一本の長い縄で、でっぴりとした一匹の豚が結わえられた。十二人の盲人たちが、あわれにも、武器としての杖を手渡され、鉄帽子を被せられ、古い錆だらけの鉄製の甲冑を着させられて、豚と戦うために、棚の中に入って行く。なぜなら、クンツ・フォン・デア・ローゼンが、豚を仕留めた者には、これを与えると約束したからである。盲人たちが輪の中に入ると、トランペットの一吹きで、攻撃が始まった。盲人たちは、その雌豚が、ぱらぱらと敷かれた藁の上に寝そべって、ぶうぶう鳴いている地点に向かって、おそろおそろ歩いていった。さあ、雌豚が、鞭の一打ちを浴びて、悲鳴を上げ始めた。一人あるいは二人の盲人の股の間を抜いて、彼らを投げ飛ばしていく。その横にいて、雌豚がぶうぶう鳴いたり、悲鳴を上げたりするのを聞いた、残りの盲人たちが、急いでこれに交じって、果敢に攻撃を開始するが、雌豚よりも先に味方に命中させてしまう。その味方は、縁もゆかりもない襲撃者に、怒りの余り反撃しようとする。そうして、最後には、こういう諍（いさか）いがあるのを知らずに、彼らが豚と戦っていると思った全くの第三者が、またそこに攻撃を仕掛けてしまう。すべての盲人たちがこの殴り合いに参加し、怒りにまかせて味方の鉄帽子を狙ったので、時折、まるで金物屋や鋳掛屋が、工場や作業所で働いているような音がした。目が見え、攻撃をかわせるという有利な立場にいた雌豚は、その間に、低い声で鳴き始めていた。この鳴き声に、盲人たちは耳を峙（そばだ）てた。彼らは、お互いどうしは間合いをとりながら、杖を手に、豚のいる方に近付いていった。しかし、豚は、すでに別の場所を探り当ててしまっていた。盲人たちは、お互いがぶつかったり、豚が繋がれている綱に引っかかったり、棚に触れた時、豚に当たったと思って、そこに恐ろしい一撃を食らわせたりした。最後に、空しい探求に費やされた数時間の後、一人の盲人の上に栄誉が輝いた。彼が、杖で豚の鼻面に一太刀（たち）を浴びせた。一一すると、無限の歓喜の声が湧き起こった。彼は、勝利者として呼び出され、戦いの伝令官から豚を授与された。これ以上ないくらい、血にまみれ、青あざだらけになりながら、彼らは、一人残らず、儀礼に則った、すばらしい祝宴の席に就いた一一。

※マクシミリアン一世＝一四五九～一五一九年。神聖ローマ皇帝。在位一四九三～一五一九年。婚姻政策によってハプスブルク家領を広げ、同家興隆の基礎を築いた。スイス諸州の独立を承認。

URALTE REICHSTAGSFEIERLICHKEIT, ODER KAMPF DER BLINDEN MIT DEM SCHWEINE

逸話

実際に会ったことはなかったが、お互いのことを多年にわたり聞き知っていた、一人はポーツマス、一人はプリマス生まれの二人の有名なイギリス人の拳闘家が、ロンドンでたまたま出会った時、二人のどちらが勝者の榮譽に値するかという問題に決着をつけるため、公開試合を行なうことを決めた。その後、二人は、公衆が見守る中、拳を握り締めて、とある居酒屋の庭で向かいあっていた。開始直後、プリマス人がポーツマス人の胸に、彼が血へどを吐くほどの一発をお見舞いすると、ポーツマス人は口を拭いながら、「やるじゃねえか！」と大声を上げた。――しかし、その直後、二人が再び立ち上がり、ポーツマス人がプリマス人の身体に、握り締めた右の拳で、彼が目を回して引っくり返るほどの一発をお見舞いすると、プリマス人も大声を上げた。「こいつは悪くねえ――！」そうして、円を描いて取り囲んでいた公衆が、大きな歓声を上げている間に、内臓を傷つけられたプリマス人が、搬送されて息を引き取り、彼らはポーツマス人に勝者の榮譽を認めた。――しかし、そのポーツマス人も、数日後には、大きな喀血の末、亡くなったのである。

ANEKDOTE

逸話

雷帝の異名をもつイヴァン・ヴァシリエヴィチ皇帝は、当時のヨーロッパの作法に倣って、帽子を取らずに参内した、ある異国の大使の頭に、帽子を釘で打ち付けさせた。この蛮行が、英国のエリザベス女王の使者、ジェレミアス・ボーズ卿を怯ませることにはならなかった。彼は、このツアーの前に、帽子を取らずに姿を現わすという大胆さをもちあわせていた。皇帝は彼に、そういう無粋なふるまいをした、お前でない大使にくだされた刑罰について、聞いてはいないのかと聞いた。「いいえ、聞いております。」と、ボーズは答えた。「ですが、わたくしは、この世のどんな王侯の前でも帽子を取ることがない、英国女王の使者、女王の代理でございます。ゆえに、わが身に降りかかるいかなる侮辱も、女王が仇を討つやり方を心得ておられるのです。」――「これこそが、勇者だ。」廷臣たちの方を向きながら、ツアーが言った。「この男は、君主の名誉のために、ふるまい、話しをする仕方を分かっている。一体、お前たちのうちの誰が、同じことをわたしのためにしてくれたことがある？」

こうして、この使者は、ツアーのお気に入りとなった。そうして、この寵愛は、貴族たちの嫉妬を招き寄せることになった。時折、皇帝と親しげな口調になるのを許されていた要人のひとりが、この使者の手際のよさを試してみましようと、皇帝に焚き付けたのである。つまるところ

、この使者は、馬の扱いに長けていると言われていた。ならば、そのことの証明のために、ツアーから乗馬用に、一疋の調教されていない極めて荒い気性の馬を贈られてはということになったのである。少なくとも、彼が不快な片輪者になることで、曲乗りの落とし前がつけられることを、皆は望んでいた。しかし、この際限のない嫉妬は、当てが外れるのを見せられるという苛立たしさに襲われることになった。なぜなら、この勇敢なイギリス人は、この馬を調教しないどころか、やたらに追いかけ回す始末で、疲れ果てた馬は国に返されることになり、その数日後には野たれ死んでしまったのであるから。この野放図なふるまいは、ツアーの使者への信認を、かえって厚くすることになった。皇帝は、それからはずっと、格別の愛顧のしるしを示されたのであった。

※イヴァン・ヴァシリエヴィチ＝初代ロシア皇帝。在位一五三三～八四年。君主専制権を強化し、周辺地の征服を宿願とした。外国から学者や技術者を招き、モスクワに初めて印刷所を設けるなど、文化的業績も多い。残忍・狂暴なところから、雷帝といわれる。

※この作品が、クライストによるものかについては、異論がある。

ANEKDOTE

逸話

小雨まじりの日に、カプチン会修道士が、絞首台に向かうシュヴァーベン人に付き添って歩いていた。有罪の判決を受けたこの男は、道すがら、俺はこんなにも陰鬱な、寒々しい空の下、このように過酷な務めを果たさねばならないと、何度も神に訴えていた。男にキリスト教的な慰めを与えようとして、カプチン会修道士は言った。「ならず者め、何をそう何度も訴えている。お前は行くだけでよい。私は、この雨の中、同じ道に戻らなければならないのだ。」――晴れの日でさえ、刑場からの帰りがどれほど実りのないものであるかを感じ取れる人であれば、このカプチン会修道士の発言を、あながち愚かであるとは思えない。

ANEKDOTE

逸話

死んだらどこに埋葬されたいかと訊かれて、ディオゲネスは答えた。「原っぱの真ん中に。」ある人が言った。「何ですって、鳥や獣に食われることをお望みですか?」「ならば、横に杖を置こう。」と、彼が答えた。「それで、鳥や獣を追い払えるように。」「追っ払うって!」別の一人が、大きな声をあげた。「あなたは死んでいて、感覚もないのに!」「ならば、一体、」と、ディオゲネスは答えた。「鳥に食われるかどうかは、どうして私が煩わされることがあろう?」

※ディオゲネス=前四〇四~前三二三年頃。古代ギリシャの哲学者。キニク派、アンティステネスの弟子。世俗の権威を否定し、自然で簡易な生活の実践に努め、「樽の中のディオゲネス」と呼ばれた。

ANEKDOTE

ヘルゴラント島の神命裁判

ヘルゴラント島の人々には、真偽が定かでない事件をめぐる争いに決着をつ付けるのに、一風変わったやり方がある。別の部族では、当事者どうしが武器を取り、血によって決着を付けるのに対して、彼らは、水先案内人の記章（二人のそれぞれが属する番号がついた真鍮製のロケット）を帽子の中に投げ入れ、仲裁裁判官にそのうちの一つを取らせるのである。それによって、番号の所有者が正しいとされる。

HELGOLÄNDISCHES GOTTESGERICHT

逸話

ヨナスという名のメクレンブルクの百姓が、その体躯の強健さで全国に名を知られていた。この地に足を踏み入れた一人のチューリングゲン人が、その名声を聞き知り、彼が本当に強いのか、あえて試してやろうと考えた。チューリングゲン人が、彼の家の前までやってくると、馬の上から塀越しに、一人の男が中庭で薪を割っているのが目に入った。「力持ちのヨナスの住まいというのは、ここかい?」と訊いたが、答えはない。

それゆえ、男は馬から降りると、門扉を開け、馬を中に引き入れ、塀のところに繋いだ。

そうして、チューリングン人は、剛力のヨナスと力試しをしたいという、自らの意思を伝えた。

ヨナスは、チューリングン人を引っ掴むと、すぐさま塀の向こう側に投げ飛ばし、また自分の仕事に戻った。

それから三十分後、壁の向こう側から男の声がした。「ヨナスさぁん！」——「まだ何か？」とヨナス。

「どうかヨナスさん、」とチューリングン人が言った。「申し訳ありませんが、馬の方もこちらに投げ返して下さい！」

ANEKDOTE

私の時代にイタリアであった不思議な話

フォン・ザクト・C皇女のナポリの宮廷に、一七八八年、彼女の話し相手、あるいはもともと歌手として、ある貧しい傷痍海軍士官の娘で、名をフランチェスカ・Nといううら若いローマ女がいた。美しく、才気に溢れた娘であったが、C皇女は、彼女の父親がなした功績によって、彼女を幼い頃から引き取ると、屋敷で養育してやっていた。皇女が、まずはメッシーナの温泉、そこからさらに、晴天や健康が一新されたという感覚に励まされて、最後はエトナ山の頂上に足を延ばすことになったある旅先でのこと、この若く未熟な少女は、不運にも、騎士であり、パリ出身の昔なじみでもある、この一行に加わっていたフォン・P子爵から、ひどく忌まわしい、無責任なやり方で辱しめを受けてしまった。そういうことで、数カ月後のナポリへの帰路の途中、母親がわりでもある皇女の足元にひれ伏して、涙ながら、自らが置かれた状況について明らかにする以外、彼女に残された道はなかった。このうら若い罪人を愛していた皇女は、彼女が宮廷に持ち込んだ醜聞について、確かに激しい調子で叱りはしたものの、これからの人生に対する永遠の更正や修道女的な隠棲や節制について、彼女が誓約したこと、後援者であり、恩人でもある人の家から彼女を遠ざけるという考えは余りにも不憫に感じられたということから、博愛主義的で、こういう場合、そうでなくても赦免の側に傾きがちな皇女の心は揺れた。この不運な女を床から抱え上げると、ただ次のように彼女は訊いた。「今まさに降りかかろうとしているこの恥辱から身をかかわすには、どうしたらよいとお思い？」ご存知の通り、このような場合、機知やそのために必要な着想が女性に不足するということはない。数日もせず、皇女自身が、女友達の名誉回復のため、次のような小さな作り話を思い付いたのである。

まず、ある晩、滞在先の宿でトランプに興じていた時、晚餐に招いた多くの客の前で、彼女は一通の手紙を受け取った。開封し、ザッと目を通すと、フランチェスカ嬢の方を向きながら、「

ねえ、」と、彼女は言った。「二年前、ローマでお会いしたドイツ人青年のシャルフェンエック伯爵が、冬の間、滞在しておられるベネチアから、あなたと結婚したいというお申し出よ。――ホラ！」と、またトランプの札に手を伸ばしながら、付け加えた。「読んでご覧なさい。高貴な、威厳のある騎士よ。このような方からの申し出を恥ずかしがる必要はないわ。」フランチェスカ嬢は真っ赤になって立っていた。手紙を受け取り、ひと渡り目を通すと、皇女の手にはキスをしながら、「陛下、」と、彼女は言った。「書状の中で、イタリアを祖国としてもよいと伯爵は言っています。ですから、私、陛下にお力添えいただいて、あの方を夫として迎え入れたいと思います！」――これに続き、書状は、お祝いの言葉と共に、人々の手から手に回された。誰も知らないこの求婚者の人となりや皆が知ろうとし、この瞬間から、フランチェスカ嬢はシャルフェンエック伯爵の許嫁と見なされることになった。その後、花婿が到着すると決まったその日、ちなみに、彼の希望でその日に同時に結婚式が執り行われる運びとなっていたが、四頭立ての旅行用馬車が玄関先に乗り入れた。「シャルフェンエック伯爵だ！」この日の祝典のために皇女の部屋に集められた全ての会席者が、好奇心を抑えられず、窓辺に押し寄せていた。人はそこで、若く、美しい、青年神のような男が、馬車から降りてくるのを見た。――その間に、あらかじめ送り込んであった付き人が、伯爵は病気で、隣室に失礼させてもらうという知らせをすぐに広めていた。この不快な一報に触れた皇女は、うろたえた様子で花嫁の方を見た。短い会話を交わした後、二人は伯爵の部屋に入ったが、およそ一時間後、司祭が後に続いた。その間、会席者たちは、皇女の宮廷付きの騎士らによって、饗応の席に招かれていた。彼らが、ぜいたくな、選り抜きの料理に舌鼓を打っていると、この若い伯爵は、病気というよりはむしろ単なる変わり者に過ぎず、生粋のドイツ紳士として、この種の華やかな集まりをよくは思っていないという知らせがもたらされた。祝宴は、夜遅く、十一時頃まで続いた。そして、皇女がフランチェスカ嬢の手を取って姿を現わし、結婚式が終わりましたという言葉と共に、集まった客人たちにフォン・シャルフェンエック伯爵夫人が紹介された。全員が立ち上がり、驚き、喜び、歓声を上げ、問いを浴びせ掛けた。しかし、皇女や伯爵夫人から聞き出すことができたのは、伯爵は元気であること、集まったお客様全員の前に遠からず姿を現わすつもりでいること、急遽、明日の朝早く、叔父が亡くなって相続しなければならない遺産があるベネチアに戻るようになったこと、それだけであった。これに続いて、もう一度、お祝いの言葉と花嫁との抱擁を繰り返した後、会席者たちは帰途についた。翌日、夜が明けるとすぐ、召使い全員の見送りを受けながら、四頭立ての旅行用馬車に乗って、伯爵は旅に出た。――それから六週間後のこと、皇女と伯爵夫人は、厳重に封印された手紙の中に、シャルフェンエック伯爵がベネチアの港で水死したという報告を受け取った。激しい乗馬の後、軽率にも伯爵は沐浴をして、そこで発作に見舞われて、まだ今この瞬間も、遺体は発見されていないということであった。この驚くべき知らせに、皇女の宮廷に属する全員が、同情と弔意を伝えるために参集した。皇女がこの忌まわしい手紙を伯爵夫人に手渡すと、伯爵夫人は失神して彼女の腕の中に倒れ伏し、嘆き、全く慰めようのない様子となった――。しかし、数日後には、転がり込んだ遺産を手に入れるため、ベネチアに出発するまでに力を取り戻したのであった。――およそ九ヶ月が経過した後（それだけ審理に時間が掛かったのだ）、ようやく戻ってきた彼女は、天が彼女に授けた小さな最愛のシャルフェンエック伯爵を皆に示した。祖

国の系譜についての深い見識をもつ一人のドイツ人は、この陰謀の基礎をなす秘密について明らかにし、この若い伯爵に、上品な素描で、彼の紋章を送ってやった。そこには、ベンチの片方の端（エック）が描かれていて、その下で子どもが寝そべっていた。それにも関わらず、この婦人は、一七九三年、フォン・P子爵がイタリアに二度目の訪問をし、皇女の指示で彼女との結婚を決意するまで、なお数年間、シャルフェンエック伯爵夫人という名でナポリに滞在した。一一八〇二年、二人はフランスに向けて出立した。

※シャルフェンエック＝ドイツ語で、とがった先端という意味

SONDERBARE GESCHICHTE, DIE SICH, ZU MEINER ZEIT, IN ITALIEN ZUTRUG

新しい（もっと幸せな）ヴェルテル

フランスのL—eに、シャルル・Cという商家の奉公人の若者がいた。彼の親方は、名前をDという、裕福な、しかし高齢の商人であったが、彼はその夫人に密かに恋心を寄せていた。彼の知る夫人がそうであったのと同じように、高潔で、まじめな人柄であった彼は、彼女に思いを打ち明けるという気には、これっぽっちもならなかった。彼は、感謝や尊敬という幾つもの絆で親方と結ばれていたから、それはなおさらであった。彼の環境が、今にも彼の健康に害を及ぼしかねないと同情した夫人は、様々な口実を使って、彼を屋敷から遠ざけてはもらえないかと夫に頼み込んでいた。夫は、彼に命じていた旅行を一日また一日と延ばしながら、最後に、「あれなしで商売をやっていくことはできんのだ。」と言ってのけた。かつてD氏は、妻を同伴し、田舎の友人の許を訪ねたことがあった。店の取り回しのため、若いCは屋敷に残されることになった。すでに全員が寝静まった夜、どんな感情に動かされたのかは分からないが、若者は、もう一度、庭を散歩しようと思いついたのであった。そうして、思いを寄せる夫人の寝室の横を通りかかると、そこに佇み、ノブに手をやり、部屋のドアを開けてしまった。彼女がいつも休んでいるベッドを見るいなや、心臓が高鳴り、誰の目もないのをいいことに、自分自身との数度の格闘の末、すみやかにあの愚行に及び、着ていたものを脱ぎ、ベッドに滑り込んだのであった。彼が安らかな眠りに就き、すでに何時間かが過ぎた夜更け頃、ここに記すまでもないような理由で、例の夫婦が不意に屋敷に戻ってきた。夫人を同伴した老いた夫が、寝室に足を踏み入れると、二人はそこに、彼らが立てた物音に飛び上がり、ベッドに半身を起こした若者Cを見出したのであった。この光景を前に、羞恥心と混乱が彼を襲った。狼狽した夫婦が回れ右をし、彼らがそこから入ってきた隣の部屋に再び駆け込んでいる間に、彼は起き上がり、自分の服を身につけた。人生に疲れた彼は、自分の部屋にこっそり戻ると、夫人に宛てて、今回の顛末を明らかにした短い手紙を書いた。それから、壁に掛かっていた拳銃を取り、自分の胸に向けて発射したのであった。こ

ここに彼の人生の物語も幕を下ろしたかのように思われた。しかし、それにも関わらず、（不思議なことではあるが、）それはここにきて初めて始まったのであった。なぜなら、それが向けられた当の若者を殺すかわりに、銃声は、隣室の老人に脳卒中を生じさせてしまったのであったから。D氏はそれから数時間後に亡くなった。集められた医師たちの技術をもってしても、彼を救うことはできなかった。D氏の埋葬が終わったそれから五日後、若者Cが目を覚ました。弾丸は肺を貫いたが、命に別状はなかった。一体、誰の筆が書き表わせるであろう――、どう言ったらいいのやら、事の顛末を聞き知り、そのために命を捧げようとまでした、愛する夫人の腕に抱かれた自分を見出した時の、彼の苦しみと、そして喜びを？ それから一年後、夫人は男と結婚した。二人は一八〇一年においてなお存命中である。識者の話によると、彼女の家族は、すでに十五人の子どもからなっているという。

DER NEUERE (GLÖCKLICHERE) WERTHER

聞いたこともない放火殺人の例

数年前、ベルリンの一角が、あの悪名高い放火殺人犯の一味に悩まされていた時、その身の毛もよだつ行為の驚くべき残忍さは、神と人の秩序に畏敬の念をもった全ての人間の理解を越えていた。しかし、そこには少なくともまだ専ら、盗むという目的があった。では、一八〇八年にルアンの刑事裁判所で扱われた法律事件について、人はどう言うだろう？ そこでは放火殺人の罪で、一人の男に死刑が言い渡された。男は六十になるまで誠実な人間と見なされ、全同胞からの尊敬を集めていた。アッタンヴィルの農夫、ジョアン・モコンドゥイというのが、男の名前であった。男はもう何年も前から、純粋な放火殺人欲に取り憑かれ、あちこちの建物に火を放っていた。しかし、先程の事情から、男を犯人だとする見方は、誰の頭にも浮かんでこなかった。男は、蓄電池で発火する奇妙な装置を考案し、それを家々に投げ込んで、着火していた。八カ月の間に少なくとも十度、この犯罪を犯し、最近では自分の家にまで火を放った。土地の所有者が、家を建て替えるよう義務づけられていることを、男はよく理解していた。しかし、それまでもしばしば、家が燃え落ちなかった際、屋根の上に残っていたのと同じ発火装置が、男の戸棚の一つで見つかったことで、近隣で生じた全ての大火の首謀者として自首すべきであるとする、男には不利な他の多くの証言も明るみに出たのであった。

BEISPIEL EINER UNERHÖRTEN MORDBRENNEREI

不思議な予言

『フランス国民軍の元士官将校による十八世紀のパリ、ヴェルサイユとその地方』（一八〇九）という著作の中で、不気味なほどの的中したある予言の話が、正式に記録された報告による考察を受けている。考慮に値しないとするには、その報告の数は余りにも多い。アプシオン生まれのこの男は、ごく若い頃はマルタ騎士団の騎士であり、一門から海上での勤務を命じられていた。そして、リヨンの司教団にいた時、同僚たちから予言者と目されていた一人のスペイン人のイエズス会士に引き合わされたのである。男は、彼を一目見るやいなや、神妙な口調で、お前はいつか教会の柱石、ディジョンの第三司教になるであろうと言い放った。当時、ディジョンには一人の司教もいなかったことから、男の言ったことは、全く相手にされなかった。アプシオン生まれのこの男は、この時をもって、学友たちから、からかい半分に司教と呼ばれるようになった。その後も、彼は、海軍士官候補生として、この渾名（あだな）を通したのであった。しかし、それから十年後、アプシオン生まれのこの男は、ディジョンの司教、そこからオーシュの大司教になった。――これらの出来事の信憑性は、全ての同時代人による確認がなされている。この誉れ高き聖職者自らもまた、生涯を通じ、このことを話題に登らせたのであった。

MERKWÜRDIGE PROPHEZEIUNG

母の愛

北フランスのサン・トメールで、一八〇三年、不思議な事件が起こった。当地で、すでに多数の人に傷を負わせていた、一匹の獰猛な大型犬が、家の玄関先で遊んでいた二人の子どもに襲い掛かったのである。犬が小さい子どもの方をズタズタにして、その子が、鉤爪の下を血まみれでたうち回っていると、水を入れた手桶を頭に載せた母親が、裏道から姿を現わした。母親は、犬が二人の子どもを傍らに残して、自分に飛びかかってくる間に、手桶を脇に置くと、そこから逃げることもできず、この怪物と刺し違えようとの決意を固めて、怒りと恨みからも力をえて、その手と足で犬にしがみついた。彼女は犬を絞め殺したが、憤激した牙でずたずたに引き裂かれて、犬の横に悶絶して倒れ込んだ。この婦人は、子どもを埋葬までしてやると、その後、数日を経ず、狂犬病によって命を落とし、子どもの隣りに埋葬された。

MUTTERLIEBE

人類の自然史への貢献

一八〇九年、ヨーロッパで、二つの奇妙な相反する人類の自然現象が確認された。一人は、いわゆる燃えない女で、その名をカロリーネ・コピーニ、もう一人は、とんでもない水飲み女で、フランスはクーロン出で、名をシャルトレといった。前者の燃えない女は、煮えたぎる油を飲み干し、硝酸、それどころか、どろどろに溶けた鉛で顔や手を洗うと、分厚い、赤熱した鉄板の上を裸足で歩き回ったが、これら全てを行なうのに、何の痛痒（つうよう）も感じなかった。対するもう一人は、もう八歳の頃から、毎日、二十カネのぬるま湯を飲み続けている。これより少ない量しか飲めなければ、彼女は病気であり、脇腹に痛みを訴えると、失神のような状態で卒倒してしまう。――それ以外では、肉体的にも精神的にも全く健康であり、二年前には、五十二歳になった。

※カネ＝昔の液量単位で、今の1～2リットルに相当する

BEITRAG ZUR NATURGESCHICHTE DES MENSCHEN

ありそうにない本当の話

「この三つの話というのが、」と、ある集まりで一人の将校が言った。「私は完全に信じておりますが、同時に、お話ししたところで、ほら吹きと見なされる恐れがある、そういう種類の話なのです。なぜなら、人は真実であることの第一条件として、ありそうに見えることを求めますから。しかし、経験が教えてくれるように、ありそうに見えることがいつも真実だとは限りません。」

「聞かせてくれよ！」その場の何人かが、大声をあげた。「聞かせてくれ！」なぜなら、その将校は、嘘のない、明朗で、尊敬すべき男として知られていたのである。

将校は、「私はあなた方を喜ばせたいとは思っています。」と、笑いながら言ったが、あらかじめもう一度、「この奇妙な事例を信じてもらおうとは思っていません。」と、断りも入れた。

居合わせた人々は、これに対し、信じるということをあらかじめ確約すると、早く話してくれと急かして、聞き耳を立てた。

「ライン出征における一七九二年の行軍の際のことです。」と、将校は始めた。「敵との一戦を交えた後、胸の真ん中に貫通弾を受けているのに、小銃と装具一式をもち、背筋をピンと伸ばして、隊伍を組んで歩いている一人の兵士に、私は気が付きました。少なくとも、弾薬盒の革バ

ンドのところに弾丸が開けた前方の穴が、上着のところに弾丸が再び飛び出していった後方の穴が、それぞれありました。この奇妙な光景を前に、自分の目を信じられない将校たちは、もう一度戦線の後方に退って、包帯を巻いてもらう方がよいと、男に勧めました。しかし、男は、何も痛くないからと言い張ると、いわゆるこの跳ね弾くらいのために、連隊から遠ざけないで欲しいと頼んだのでした。夕方になって、野営地に戻ると、外科医が呼ばれ、怪我の具合を確かめました。そして、胸骨を砕く力を持てなかった弾丸が、これに跳ね返され、柔らかくたわんだあばら骨と皮膚の間を通り、体の周りをツルリと一巡し、後ろ側で背骨の端に当たって、元々の垂直な方向に戻り、再び皮膚から飛び出していったことが明らかになりました。ちなみに病人は、肉まで達するこの小さな傷でも、創傷熱になっただけでした。何日もせぬうち、男は再び隊伍を組んで立っていました。」

「何ですって？」その場の何人かが、驚いて尋ねた。そして、何か聞き間違えをしたんだろうと考えた。

「弾丸が？ 体の周りをツルリと一巡？ 循環して？」一一居合わせた人々は、笑いを堪えるのに苦労していた。

「これが一つ目の話です。」と、煙草を一つまみ取りながら、将校は言うと、押し黙った。

「全くもって！」一人の田舎貴族が、口走った。「この話は、仰られたことは本当だとしても、なかなか信じられない、そういう類いのお話ですな！」

「それから十一年後の、」と将校は言った。「一八〇三年のことです。私は、ある友人とともに、ザクセンのケーニヒシュタインの町にいました。ご存知のように、この町の近郊の、だいたい三十分のところにある、峻険（しゅんけん）な、おそらく三百フィートの高さをもつエルベ川の河岸の縁には、相当な規模の採石場があります。労働者たちは、大きな岩塊に行き当たって、工具では手が出せないような時には、固い物質、特にパイプの柄を割れ目に投げ入れます。そうして、この小さな物質がもつ楔（くさび）のような作用に、岩塊を完全に岩壁から剥ぎ取るという仕事を委ねるのです。たまたま、まさに今時分のことですが、途轍（とてつ）もない、何千立方フィートもある岩塊（がんかい）が、エルベ川の河岸の採石場の平地に落ちようとしていました。そして、山々に響き渡る奇妙な轟音と、大地の振動が引き起こす他の様々な現象によって、この光景が印象的なものとなるために、他の多くの市の住民たちに交じって、私と友人もまた、岩塊が落ちる瞬間を見物しようと、毎夕、採石場に足を運んでおりました。ところが、その岩塊は、真っ昼間、我々がケーニヒシュタインの宿屋で食卓を囲んでいる時に落ちたのです。そして、夕方の五時になってようやく、我々は散歩に出ると、岩塊が落ちた状況について見聞（けんぶん）するための時間を持ちました。ところで、その岩塊の落下による効果はどのようなものだったでしょう？ まず、採石場の岩壁とエルベ川の河床の間には、さらに相当な広さの幅五十フィートほどの地帯が存在していたのを知ってもらう必要があります。そういうことから、岩塊は（ここではそれが重要です）、直接、エルベ川の水面にではなく、この地帯の砂地の地面に落ちたのです。この落下による効果ですが、皆さん、落下によって引き起こされた風の圧力で、はしけ舟が陸に打ち上げられました。長さ六十フィート、幅三十フィートの、木材を満載して、エルベ川のもう一方の対岸に繋がられていた小舟です。運命のいたずらは、これを砂の上に打ち

上げてしまいました。――私はどこまで言いましたっけ？ 次の日もまだ、梶子とコロを使って、小舟を再び水に浮かべ、岸边からまた水の中に引き入れようと奮闘する労働者たちを見ることができました。エルベ川全体（の表面）がその瞬間に氾濫し、その反対側の平らな岸边に向かって溢れ出て、固い物質としての小舟をそこに置き去りにするというのは、ありえる話です。まるで何か、木切れが、それを浮かべていた水が揺すられた時、平らな容器の縁に取り残されるようなものです。」

「で、その岩塊は、」と居合わせた人々は訊いた。「水の中に落ちなかったのですか？」

将校は、繰り返した。「ええ！」

「そんな馬鹿な！」人々が大きな声を上げた。

田舎貴族が言った。「あなたは、発言の裏付けになる話を探してくるのがお上手だ。」

「三つ目の話は、」将校は続けた。「オランダ自由戦争におけるフォン・パルマ公爵によるアントワープ包囲戦の際に起こりました。一艘の浮き橋で公爵がシェルデ川を封鎖すると、アントワープ人は、派遣されたイタリア人の手ほどきで焼き討ち船を浮き橋に向けて放ち、これを爆破するという作戦に取り掛かりました。そして、皆さん、船がシェルデ川を遡上して、浮き橋に向かって漂っていたその時、よく覚えておいて下さい、シェルデ川の左岸、フォン・パルマ公爵のすぐ横に一人の士官候補生が立っていました。その時、お分かりですね、その時、爆発が起きました。そして、この土地貴族は、丸々、旗や装具一式ごと、途中、一切のかすり傷もなく、右岸に立っていたのです。そして、ここではシェルデ川は、もうお分かりでしょう、小砲の射程の幅しかありませんでした。」

「ご理解いただけます？」

「何とまあ、どれもこれも。」田舎貴族が大きな声を出した。

「以上です！」と将校は言うと、杖と帽子を取り、その場を後にした。

「中隊長殿！」別の人が笑いながら言った。「中隊長殿！」――彼らは、男が真実として提示したこれらの奇妙な物語の出所だけでも、知りたいと思ったのだ。

「教えて下さい。」と、居合わせた人々の中の一人が言った。ちなみに、この話は、統一オランダの没落について書いたシラーの小説の付録に収められている。詩人がこの事実を使うことはなかったが、出所の完全性、多くの証拠の一致から、これを収録することを歴史編集者が強いられたのを、この著者はよく分かっていた。

※焼き討ち船＝火薬類を満載し、これを風上に流して敵船に火を放つもの

UNWAHRSCHEINLICHE WAHRHAFTIGKEITEN

一八〇三年七月三十日付のヴィーナー新聞は、ハンガリーのケーニヒスゼーの漁業従事者が、操業中、もう何度も、裸の、いわゆる四つ足動物の一種を目撃しており、誰かが姿を見せると、岸から水中にすばやく飛び込んで、姿を消してしまうので、それがどの種に属するかはまだ明らかになっていないと報じている。漁師たちは、結局、一七七六年の春、自らが仕掛けた網で捕まえるまで、この想像上の動物を探し求めていた。そして、捕まえてみて、驚きと共に、それが人であるのを見出したのであった。彼らはすぐ領主の管理人がいるカプヴァールまで運んだ。管理人が管理局にこの件を報告すると、水男をしっかりと拘留し、監視のために衛兵を一人付けるようにとの命令が下った。当時、水男は年の頃、十七くらいで、体躯（たいく）もガッシリとして、発育もよかった。手と足だけは、ひん曲がっていた。なぜなら、四つん這いだったからである。手と足の指の間には、薄い、鴨のような膜があり、他の水生動物と同様、泳ぐことができた。体の大部分は、鱗で被われていた。

人は二足歩行を教えた。初めの頃は、餌として生魚と蟹だけを与えた。彼は大いなる食欲を示してそれを平らげた。また、大きな桶に水を張ってやると、その中で喜びを一杯に表わして沐浴をした。衣服はしばしば彼にとっては重荷であり、徐々に慣れるまで、それは投げ捨てられた。煮込み料理、野菜料理、小麦粉料理、肉料理には、全くなじめなかった。なぜなら、胃が受け付けないのである。彼はまた、言葉を学習し、すでに片言を口にし、勤勉に働き、素直で、従順であった。しかし、九ヶ月という時が過ぎ、もはやそれほど強い監視の目が置かれなくなると、城郭を出て、橋を越えて、水で満たされた濠（ほり）をジッと見詰めた後、着衣のまま飛び込み、行方をくらましたのである。

すぐに再捕獲のための手はずが整えられたが、全ての探索は徒労に終わった。その後も、特に一八〇三年のケーニヒスゼー運河の建設の際、再び目撃されたが、もう一度、捕獲されるまでには至っていない。

この事件は、それまで作り話とされてきた、いわゆる人魚と呼ばれる多くの海洋現象に光を投じる。グリーンランドの発見者であるハドソンは、二度目の航海の途上の一六〇八年六月十五日、人魚のような生物を発見し、乗務員全員も一緒にそれを目撃した。彼女は船べりまで泳いでくると、船員たちの顔をマジマジと見た。頭部から下腹部までは普通の体つきの女性そのものであった。肌の色は白かった。黒色の長い髪を肩の辺りで翻（はた）めかせていた。クルリと人魚が後ろを向いた時、船員たちは彼女の尾びれを見出した。それはイルカのそれと多くの類似点があり、サバの尾びれのような斑点があった。一一一七四〇年、西フリースラントのポーランドの堤防を破った大嵐の後、水に浸かっていたいわゆる人魚が牧草地の上に見出された。彼女はハールレムに運ばれ、服を着せられて、糸紡ぎを教えられた。普通の食事を摂って、数年間を生き長らえた。言葉は覚えず、瀕死の人間が呻くような声であった。彼女はいつも水への強い衝動を示した。一一一五六〇年、セイロン諸島の漁師が、沢山の同様の怪物たちを一網打尽にした。人魚を探し求め、幾人かの宣教師の立ち会いの下、何匹かの死んだ人魚を解剖すらしめたディマス・ボスクエンツ・フォン・ヴァレンスは、内側にある全ての部分が、人間の肉体と極めてよく整合しているのを見出した。人魚は、丸い頭蓋、大きな目、ふくよかな顔、平たい頬、上に反った鼻、

真っ白な歯、灰色の、多くの場合、青みがかった髪、長く、青い、お腹まで垂れ下がった髭をしていた。――この中には、いわゆるナポリの魚小僧も含まれる。それについては、ゲーラーの『物理学辞典』の中に信頼すべき記述がある。

WASSERMÄNNER UND SIRENEN

イギリスであった奇妙な事件

周知のように、イギリスでは、自らの裁判官に対する立場に関して、あらゆる被告人は十二人の陪審員を割り当てられる。陪審員の刑の申し渡しは、全会一致でなければならない。そして、決定を長引かせないため、一つの意見にまとまるまで、彼らは飲まず食わずで閉じ込められる。ロンドンから数マイルのところに住んでいた二人の紳士が、何人かの目撃者が見ている前で、極めて激しい口論をした。一方が他方を脅して、「二十四時間以内に、お前は自分のしたことを後悔するだろう。」と、言い渡した。その日の夕方、その貴族の射殺体が発見された。嫌疑は、当然、脅しの言葉を吐いた男に向けられた。彼は囚われの拘禁状態に置かれ、裁判所が設立され、多くの証拠が提出され、十一人の地主は、彼を死刑にするべきと弾劾した。ただ、十二人目だけは、私は無実と思うから、賛成できないと頑強に言い張ったのであった。

なぜそう思うのかの根拠を示すように同僚たちは迫ったが、彼は皆には迎合せず、ただ自分の意見に拘（こだわ）るのであった。すでに夜もすっかり更けて、裁判官たちはひどい空腹に苦しんでいた。とうとう一人が立ち上がり、「一人の罪人に許しを与える方が、十一人の無実の人を飢え死にさせるよりましでしょう。」と言った。そうすることで、恩赦が決定したが、同時に、裁判所がそうするように強いられている状況も申し立てられた。全ての公論が、一人の石頭と対立していた。その上、事件は国王の知るところとなり、国王は男との面会を所望（しよもう）された。貴族が姿を現わした。そして、「正直に語っても、悪いようにはしない。」という言葉をもたらした後、彼は国王に語った。「夕暮れの中、狩りから戻って、銃が暴発した時、それが不幸にも茂みの陰に立っていたあの貴族に当たったのです。私には、」と、彼は続けた。「自らの行為の証言者も、無実の証言者もありませんでした。ですから、沈黙を守ろうと決めたのです。しかし、無実の人が逮捕されたと聞くに及び、陪審員の一人になろうと全力を尽くしました。被告人を死なせるくらいなら、いっそ餓死してやろうとほとんど決意を固めながら。」国王は約束を守り、貴族は恩赦を賜った。

SONDERBARER RECHTSFALL IN ENGLAND

不思議な決闘の話

フォン・アレンゾン伯爵の家臣である、騎士のハンス・カルージュは、一門の用件で船旅に出た。若く美しい妻は、城に残すことにした。灰色のヤーコプという渾名（あだな）の伯爵の家臣の一人が、この婦人にひどく入れあげていた。法廷において、目撃者は、某月某日の某時刻、伯爵の馬に跨がって、婦人が逗留していたアルジャントウイユの城にこの男が姿を現わしたと証言している。夫の仲間、友人として彼女は男をもてなし、城の中のあらゆる場所を案内してやった。さらに男が、眺めのよい場所、城に付随する物見の塔も見たいというので、彼女は自ら、一人の召使いも従えず、塔に招き入れてやった。

塔に入ると、怪力のヤーコプは扉を閉めて、婦人を掻き抱き、ひたすらおのれの激情に身を委ねた。ヤーコプ、ヤーコプ、泣きながら婦人は言った。あなたはわたしに辱めを与えましたね。しかし、夫が戻ればすぐにも、屈辱があなたを襲うでしょう。ヤーコプは、この脅しを大事とは受け留めず、馬に跨がると、ひたすらに鞭を打ち、その場を後にした。その日の朝の四時には、まだ彼は〔伯爵の〕城にいて、もう九時には伯爵の引見の場に顔を見せていた。――この状況をよくご記憶いただきたい。ハンス・カルージュがようやく旅から戻ってみると、いきいきと細やかな愛情を表わしながら、妻は彼をもてなしてやった。しかし、彼が寝室に向かって、眠りに就こうとしたその夜、長い間、部屋の中をいったりきたりして、時折、胸のところで十字を切っていたが、最後にベッドの前に跪くと、涙ながらに身に起こった全てを語って聞かせた。初めは本気にしなかったハンスも、妻の誓約、繰り返される言明によって、最後には信じざるをえなくなってしまった。復讐の思いだけで、心は一杯になった。自分と妻の親戚を集めると、この件を伯爵のところに持ち込んで、裁きをお願いしてみようということで、全員の意見が一致した。

伯爵は、当事者たちを御前に呼び集めると、彼女の言い分に耳を傾けたが、あっちへいき、こっちへいきする議論の末、この婦人の話は夢であるに違いない、なぜなら、色々と副次的な状況はあるにせよ、一人の人間が二十三マイルの道のりを進みながら、ヤーコプが城にいなかった唯一の時間である五時間半という短い時間に、同時に、咎められた犯罪を行うことは不可能である、という結論に達したからであった。同時に、フォン・アレンゾン伯爵は、これ以上、この件についての口外は許さないとも彼らに命じた。しかし、魂の人であり、名誉の問題には極めて敏感でもあった騎士ハンスは、この決定を受け入れるのをよしとせず、この件をパリの議会に持ち込むことにした。ここでの裁判は決闘だと決められていた。当時、フランドルのスリュにいた国王は、自分も観覧がしたいから、わたしが戻るまで決闘の日を繰り延べるようにとの命令書を持った伝令を走らせた。ベリー、ブルグント、ブルボンの大公たちも、この光景を一緒に見物しようと、パリに向かった。決闘の場としては、聖カタリーナ広場が選ばれ、見物人のためにと、足場が組まれた。頭のとっぺんからつま先まで武装した、二人の戦士が姿を現わした。例の婦人は、黒づくめの服装で車上の人となっていた。彼女のところまで歩み寄ると、夫は言った。マダム、この決闘では、わたしは、あなたの誓いのため、命を賭けて、灰色のヤーコプと剣を交えます

。この一件の正義がどちらの側にあるのか、あなた以上に分かっている人間はおりません。――騎士様、と婦人は答えた。本件の正統性はあてにしてもらって構いません。確信をもって戦いに臨んでもらえればと思います。そこまでのことをすると、カルージュは妻の手を取って、接吻をし、十字を切って、柵の中に入った。戦いの間も、婦人はずっと祈り続けていた。彼らの置かれた立場は、厳しいものであった。なぜなら、敗北が決まれば、彼は絞首刑、彼女はいかなる斟酌（しんしゃく）もなく、火刑（かけい）に処されるのであるから。二人の戦士に大地と太陽が割り当てられるやいなや、馬を駆り、槍を手に、二人はお互いに向かって突進した。しかし、両者が手練れであったために、相手に傷を負わせるまでには至らなかった。それゆえ、二人は馬から降りると、抜刀（ばっとう）をした。カルージュが太腿に傷を負った。友人たちは彼の将来を案じ、妻は精も根も尽き果てた。しかし、敵に向かってカルージュがありったけの怒りと俊敏さで攻勢に転じたので、相手を地面に投げ飛ばし、胸に剣を突き立てることができた。ここまでのことをすると、観客たちの方に向き直り、少し大きな声で言った。「わたしは、義務を果たしましたか？」全員がこれに唱和して答えた。「そうだ！」ヤーコプの遺体をすぐに死刑執行人が運び出し、絞首台に吊した。国王の足下に騎士のハンスが跪（ひざまず）くと、ハンスの勇気を国王は賞揚し、その場で千リーブルを与え、終身で二百リーブルの給金を約束し、さらに息子は侍従に取り立ててやった。それから、カルージュは妻のところに駆け寄ると、皆の見る前で抱きあい、神に感謝の言葉を述べて、祭壇に捧げものをするため、教会に赴いた。これらのことは、フロワサールの筆によるが、全て事実である。

※フロワサール＝一三三七～一四〇五年。フランスの年代記作家、詩人。イギリス、フランス、イタリアなどの王侯貴族の宮廷を歴訪。一三二五～一四〇〇年のフランス、イギリスなどの封建貴族社会や百年戦争の状況などを簡潔に記した散文の『年代記』のほか、多くの詩作品を残した。

。